

ら、そのことについても少しお話を聞かせただけませんか。

竹村 伊與田先生の前で龍の話ができるなんて栄光です。肝心部分は先生に補っていたたくとして、普段セミナーなどでお話ししていることをお伝えさせていただきたいと思えます。

「易経」はすべてを生かす宇宙の根源に「太極」があると説きます。その混沌としたパワーから陰陽の二つが生まれ、この二つがお互いに補い合いながら万物を生成発展させると考えられます。男性と女性が結ばれて人類が繁栄していくのもそうですね。

これを組織に当てはめると陽はリーダー、陰は守られるべきもの、従っていくものとなりますが、ただ「易経」は便宜的に陰陽に分けているだけで、この二つは元々一つのものなんです。陽は陰によって陽の力を、陰は陽によって陰の力を発揮する。だから陰陽が一つにならないと何も生まれません。これは「易経」が最も強調する部分です。陰陽が交わって新しいものが生まれて、物事は循環していくわけですから。

伊與田 そのとおりですね。

竹村 それで陽の働きのとえとして出てくるのが「易経」の冒頭にある「乾為天」の龍の変遷です。

「易経」がなぜ想像上の生き物である龍を取り上げるかという点、大自然は天と地が交わって雨を降らせ、その恵みの雨によって万物が生育します。雲を呼んで恵みの雨を降らせる龍の姿にたとえて、人間界においても陽の立場の人はそういう役割を果たしていかねばならないという教えます。

龍だけでは雨は降らせられません。雲は陰ですから、陽である龍が陰である雲を呼んで雨が降るように、陰陽が一つになって大いなる循環を起こしていくには、どうすればよいか「易経」には書かれているんです。

伊與田 そうですね。

竹村 もう一つ、「易経」を語る場合に押さえておかななくてはならないのは、この書物が「時と兆しの専門書」ということです。そして「易経」が説く時は単なる時間ではなく、時、処、位が三位一体になったものなんです。

これを龍の話で見ると、最初は時を得ず力も発揮できない「潜龍」の状態です。その龍が大いなる志を持つことよって、ある一定の期間を隔てて大人と出合い、その出合いによって

潜龍は「見龍」に成長していきます。自分で自分の姿が見え、人からも認められて、社会である程度役立つ存在に

なるわけですね。

見龍は大いなる循環を起こすためにワンストップ上がった状態で、基礎力をつけねばならない時期です。この見龍が見習うべきは本来の龍の姿であり、志であり、本来の力の発揮の仕方です。

伊與田 将来「飛龍」になるためにはまだステップが必要ですね。

竹村 はい。見龍になり次に進むと「君子終日乾乾し、夕べに惕若たり」という段階です。

「終日乾乾し」とは「朝から晩まで一日中、前向きに積極的に努力して進んでいくこと」、「夕べに惕若たり」とは「夜になったら、きょうはこれでよかったのか、あれでよかったのかと省みなさい」という意味です。これは「中庸」や「大学」でいう「慎独（独りを慎む）」にも通じることです。

ここでも陽（日中の行動）と陰（夜の自省）は龍の中で一つであることが求められています。「見龍」は基本はできていても応用力はありませんから、応用力を養うために意志を持って努力して進んでいくのがこの「乾惕」の時代です。

驕り高ぶつた龍は

いすれ失墜していく

竹村 「乾惕」の反復を続けて継続し

ていった時に、突然力がついてきます。何が起きても対処する能力と、その状況を好転させて推進していくだけの力です。リーダーとしての素養もこの時期までに養っていないとやはりなりません。そして「乾惕」の龍はやがて「躍龍」になるのですが、この段階では一瞬躍つたとしても、まだ飛龍ではない。いわば飛龍のまねごとでシミュレーションです。

そして飛龍になる前に、もう一度潜龍の志に返って、自分がやろうとしていることが間違っていないか、志が変わっていないかを確かめなくてはならない。なぜなら「易経」が一貫して言っているように志は変質変容していき、地位が上がると、おもしろいことが出てくるほど、人間はそれが欲しいがために志をそれに合わせるようになるからです。

そしてその段階では機、兆しを観る力をつけることも重要です。見えないものを観る力がついた時、ようやく飛龍になります。そうなるとあらゆる物が、時も処も位もすべて飛龍の大きな流れをかたちづくるようになります。

躍龍は周囲に押されるようにして時を得て飛龍となって空中を大いに翔けめぐりながら、雲を呼んで恵みの雨を降